

国際文化学部鹿毛敏夫教授の
「大友義鎮～狭間美濃守に石細工工事を指示～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2022 年 11 月 25 日(金)

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

「甲斐家文書」という古文書史料群の中に、大友義鎮（宗麟）が狭間美濃守らに宛てた次の書状があります。

「種田庄において、石細工の儀を申し付け候、其方領内へ、石切多々これ有るの由に候、申し付けられ、馳走に預かり候はば、祝着たるべく候、委細は田吹次郎左衛門尉申すべく候」

「種田庄内で石の細工工事を命じた。隣接するそなた（狭間氏）の領内にも石切の技術を持った職人が多くいるとのことなので、彼らに種田での石細工作業を手伝うよう指示してもらえればありがたい。詳細は家臣の田吹が伝える」との内容です。義鎮の花押から、書状は天文22（1553）年から永祿4（61）年のものと分かります。狭間氏は大友氏庶子家の一つで、阿南庄の狭間（由布市狭間町）に拠点を持つ武家です。大友家当主が狭間美濃守に命じた、石切職人による石細工とは、どのようなものだったのでしょうか。

戦国時代は、大規模土木工事が行われた時代でした。各地の戦国大名は、館や城を建て、城下町を建設・整備し、鉾山を開発し、河川の治水・かんがいなどの事業を行いました。大友氏の領国でも、大友義鑑

大友氏館跡の庭園遺構で出土した巨石群（2016年8月の状況）



大友義鎮 狭間美濃守に石細工工事を指示

が天文13（44）年に本拠地府内（大分市）の中心部に「土蔵」を、同16（47）年に「役所」「乾屋敷」などからなる館を建設したことが、史料から明らかです。また、その子の義鎮が、天正元（73）年に館の大規模拡張工事に着手し、館内の各施設を建て替えて、その四方を「土垣廻屏」と称した土塁と築地塀で囲んで新しい館を完成させたことや、義鎮と息子の義統がその翌年以降に館の築地塀を基軸とした都市府内の全面的な町割り直し事業を実施したことも判明しています。さらに、義鎮は三船井路（由布市狭間町）、義統は窪郷井手（大分市賀来―南大分）の開削によるかんがいも実施しています。

これらの土木工事のうち、書状の石細工に相当するものとして、府内の大友氏館跡で発見された東西67㍎・南北30㍎の大規模庭園遺構が注目されます。15世紀末に築かれたこの池庭は、16世紀後半にかけて2度改修されたとされ、特にその最終段階では、池の東半分は1〜3㍎の巨石を多く運び込んで配置し、護岸の石組みや滝として演出していたことが、発掘調査で明らかになっています。

狭間美濃守配下の石切職人たちを動員して種田庄内で行った「石細工」とは、この大名館内の大規模庭園の巨石を山から切り出して運び、加工して池庭に配置する土木工事だったのかもしれない。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）

11月1回掲載